



Title	宗教と教育
Author(s)	松田, 義哲
Citation	北海道学芸大学紀要. 第一部. C, 教育科学編, 14(1): 14-23
Issue Date	1963-07
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/3876">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/3876</a>
Rights	

# 宗 教 と 教 育

松 田 義 哲

北海道学芸大学岩見沢分校教育学研究室

Yoshiaki MATSUDA : Religion and Education

## 序

今から十三年前、すなわち昭和25年に公けにした拙著「教育学」（日本女子大学発行）の中で、筆者は、すでにこのテーマについて見解を發表したことがある。今もその根本の思想においては変りはないが、しかし十三年間に筆者の現代という時代に対する認識が深まるにつれて、補足したい点も心に浮んで来るので、改めて同じテーマについて考えてみることにしたい。この問題については、人それぞれに考えるところがあり、一つの見解をもつて他を律することは種々の弊害を伴うが、しかし単なる理論としてではなく、歴史的に生きるわれわれ自身の問題として考えるとき、帰決するところが全然見当らないというようなこともないように思われるので、敢てこの問題と取り組んでみることにする。

## I 教育における宗教の地位

人間は宗教の問題に無関心ではいられない。その主な理由は二つある。一つは、よりよく現世に生きるためであり、もう一つは死の日に、よりよく死することができるためである。これまで革命的プログラムによつて一挙に社会的効果をあげようとする人々は概して宗教の問題には無関心の態度をとつて来たが、しかしそれらの人々も一度び死の問題に想到するや、宗教に対して、それほど無関心ではいられないのではなからうか。しかしここでは、われわれは宗教を死の問題と関連させないで、教育との関連において、主として社会学的問題として考察してみたいのである。なぜならばこの問題は、これまでの教育において比較的に等閑に附されていたからである。特にキリスト教に対する認識と理解の浅薄さは、わが国の教育の上に測り知ることのできない不利をもたらしたといえることができるのではなからうか。なるほど最近教科書の上にも、この方面の知識がかなり盛られてはいるが、しかしそれは単なる教材であつて、これを取り扱う教師にも、またこれを学習する児童生徒にも、それに対処するための充分の準備がないというのが偽らざる現状ではなからうか。この無知が、いかに大きなマイナスを意味するかは、歴史的認識が深まれば深まるほど明瞭になることであろう。

ところで、よりよく教育することができるためには宗教的精神が必要とされるということについては、昔から多くの人々によつて主張されて来た。そしてこれを教育実践の上で実証した人として、われわれはペスタロッチー（J. H. Pestalozzi 1746-1827）の名をあげるに躊躇しないであらう。実にペスタロッチーの全教育学体系はキリスト教的世界観の上に成り立っているといつてよい。尤もペスタロッチーのキリスト教は、あくまでヒューマニズムの立場に立つものであり、

従つてしばしば非キリスト教的とさえ評されるのであるが、しかし彼の宗教がキリスト教の本質にかなつたものであることは、欧米の思想家もひとしく認めているところである、このことは1846年ペスタロッチー誕生百年記念祭にチューリヒ郊外のビルの農村に建てられた彼の墓にきざまれた墓碑銘によつてうかがい知ることができる。それは周知のように、「人間、キリスト者、市民。すべてひとのために、おのれのためには何ものをも、恵みあれ彼が名に！」という言葉で結ばれている。たしかに彼の思想がそのままキリスト教の教義に一致するか否かは問題となるであろうが、しかしそれにもかかわらず誰一人として彼がキリスト教徒であることを否む者はない。それは教義そのものについての論議よりも、彼の歩んだ教育者としての生涯が何ものにもまさつて彼のキリスト教を実証するからである。教義の面で問題にされるのは、彼の宗教が道徳と区別されないという点である。たしかにペスタロッチーにおいては宗教と道徳との間には区別がない。これは彼のヒューマニズムから導き出される当然の帰決であつて、彼だけでなく、カント (I. Kant 1724-1804) とカゲーテ (J. W. v. Goethe 1749-1832) の如き当時の思想家には一般的に見られる傾向である。しかしキリスト教をヒューマニズムの限界内にとじ込めることには問題があるとしても、キリスト教の本質が道徳と別には考えられないことは明らかである。

要するに、キリスト教はペスタロッチーの本質を形成する。しかしこれまでのわが国のペスタロッチー研究においては、この方面は比較的ひかえ目にしか取り扱われていない。それはキリスト教がわが国の精神的文化にとつて異質的と考えられた偏見から来ている。しかし人間という立場からは、キリスト教も、あながち異質的とばかりはいえない。私は思う。キリスト教を異質的とする偏見が、もう少し早く取り除かれていたら、恐らく第二次世界大戦は、従つて原子爆弾の惨禍は避けられたことであろう。しかし人間の目ざめは深刻な経験ののちに來るのが普通である。

今にして思えば、内村鑑三 (1861-1930文久1-昭和5) の予言者的風格をなつかしく思う。彼は、すでに明治36年3月10日付の「日本国の大困難」と題する論文において次の如く論じている。特に私は彼がペスタロッチーに関心をもち、この問題の考察においてペスタロッチーを最も重要な手がかりとしたことに関心をもつ。言うまでもなく教育者というよりはキリスト教徒たることに真の自己を見出していた当時の彼にとつては、ペスタロッチー研究が目的ではなく、日本とキリスト教との関係を考察する手がかりとして、当時すでにアメリカを通してわが国に導入されていたペスタロッチーを取り上げたにすぎないのである。「近世教育なる者が概ね基督教の賜物であることは少しく西洋の教育歴史を読んだ人の否むことの出来ない事実であります。誰もペスタロッチーの伝を読んだ人で彼が非常に熱心な基督教の信者であつて、彼の新教育なるものは皆な深き彼の宗教的観念の中に案出されたものであることを拒む者はない筈であります、フレーベルも同じ事であります、ヘルバルトも同じ事であります、彼等フレーベルやヘルバルトより基督教の信仰を取り去つて御覧なさい、彼等の開始<sup>はじ</sup>めた教育の精神は取り除かれるのであります、然るを今の日本人はペスタロッチ、フレーベル、ヘルバルドの教育法を採用して其根本たり、源因たり、生命たる基督教は嫌つて是を採用しないのであります、日本国の教育が実に異常のものであつて、体あるも靈魂なく、四肢あるも脳髓がないやうな者であるのは全く是れが為めであります」。<sup>1)</sup>

内村鑑三はもつぱらペスタロッチーの宗教としてのキリスト教を問題にしている。そのことはキリスト教の伝道に身を献げた彼にとつては当然のことである。彼の主張の焦点は次の箇所にある。「基督教文明とは読んで字の如く基督教に由て起つた文明であります、すなわち基督教なく

しては起らなかつた文明であります，故に基督教を学ぶにあらざれば解することの出来ない文明であります，然るに日本人は基督教文明を採用して其根本たり，其起因たり，其精神たり，生命たる基督教其者を採用しないのであります，是は恰かも人より物を貰つて其人を知らず，其人に感謝しないと同一事でありまして，斯る不道理なる且つ不人情なる地位に自己を置いた日本人が窮りなき困難に際会しつづつあるのは最も当然の事であると思ひます。我等の今日為すべきことは何んでありませうか，我等は西洋文明を棄てませうか，否な，そんな事は決して出来ません，故に今より直に進んで西洋文明の真髓なる基督教其物を採用するのみであります，是れ日本国の取るべき最も明白なる方針であります」<sup>2)</sup>

思うに過去の日本が何の抵抗もなしにキリスト教をとり入れていたら，わが国はキリスト教国になつた代りに，第二次世界大戦は，きつと別なかたちをとつたことであろう。従つて，さきにも述べたように，原子爆弾の惨禍も恐らく避けられたことであろう。しかし今は仮定法を用うべきときではない。現実には現実として受けとり，そしてこれとの対決の仕方を考えなくてはなるまい。ところでわれわれが，ここで問題とするのは，主として現代の教育である。ここに現代とは1945年以後の時代のことである。言うまでもないことであるが，1945年を境として，われわれは歴史の進め方の上に大きな変化を考えざるを得なくなつた。なぜかというに，われわれの正常なセンスでは，もはや大規模な戦争を考へることができなくなつたからである。従つて国家のあり方にも修正が加えられ，国際主義がそれだけ実在性をまして来たことになる。この問題についてはボストン大学のブラメルド (Theodore Brameld 1904— ) 教授の主張する改造主義 (Reconstructionism) の哲学に関心がひかれるが，この哲学についての考察は別の機会にゆづりたい。国家主義にしても，階級主義にしても，とにかく戦争への動機を含むあらゆるイデオロギーには批判的な目が向けられることになる。これまで歴史の推進力と考えられていた国家主義や階級主義は飛び越すことのできない一大障壁にぶつかり，歴史創造の方式も新たに考え直さねばならなくなつた。これは，たしかに歴史の歩みにおける一大変化でなくてはならない。この問題は，すでに広島・長崎に原子爆弾が投下された瞬間に提示された問題であつたが，当時それは一般の人々の認識するところとはならず，以来それは未だ試論の域を脱しなかつた。しかしキューバ危機の発生した今日，それは，もはや単なる試論ではなくなつたといつていいのではないか。それだけに広島・長崎の歴史的意義も明確になつたといえよう。

さて残る道はただ一つ，国際主義の道しか考えられないとすれば，宗教の問題は，それが国際的な意義と政治力とをもつことが多ければ多いほど，重要な意味をもつて来る。なぜなればそれは教育の目的や方法の規定に参与することにもなるからである。かくて教育には宗教的精神が必要だという伝統的な考え方の上に，更に現代の教育は，好むと好まざるとにかかわらず，宗教を無視することはできないという新たな考え方が強くわれわれの思惟を支配するのである。

## II エロスとアガペ

真実の教育が成立するためには，宗教的精神が必要であることについては，理論的には，ニグレン (A. Nygren) におけるように，エロスとアガペの問題として説明され得るであろう。

ギリシヤのヒューマニズムの本質を形づくるエロスの価値観においては，文化価値を実現することが目的であるから，その目的にかなうもののみが重んぜられる。従つて，そこでは，のちの時代のカントが言うように，人間はそれ自体目的として尊敬されるのではなくて，文化価値実現の単なる手段にすぎない。だからプラトンは，人間を極く少数の階級，すなわち支配階級・軍人

階級及び生産階級三つの階級に区別し、そして国民の大部分を形成し、社会の基盤を形づくる生産階級をば、全く教育に値いせぬものとして軽視したのである。例えば「国家」(Politeia)篇第四卷における四徳論において、支配者には智慧を、守護者には勇気を、各々その階級に固有の徳として従属せしめているにもかかわらず、生産階級には、その階級固有の徳を認めていないが如きは、まさにそのよき実例である。プラトンはこの階級は文化価値実現の目的には全く役立たないと考えた。また彼はこの階級こそ国家を支える基盤であり、国家の運命は実にこの階級に依存することを自覚しなかつた。この点ではギリシヤ人全体が無感覚だつたともいえる。彼らは公然と奴隷階級を認め、そして彼らをその人格的価値の故に尊敬することを知らなかつた。エロスの価値観のみに依存する彼らとしては当然のことである。デモクラシーという言葉をつくり出したのはギリシヤ人であるが、しかし彼らのデモクラシーは、以上に述べた如き意味でのデモクラシーであつて、未だ充分開化されたものではなかつた。ギリシヤ人の間では未だ真の意味での人格的社会は成立していなかつたと考えてさしつかえない。

さてエロスの価値観の弱みにつけ入つて、遂にこれを圧倒し、そしてその優越せる点をも取り入れて、いまやデモクラシーという名で世界の人々を支配するイデオロギーにまで発展させる上で、エロスの価値観以上に大きな役割を果したものは、キリスト教的価値観(エロスの対立概念としてはアガペ的という言葉を用いるのが当然であろうが、ここでは特にキリスト教的ということにする一筆名注)である。それは、ギリシヤの哲学が貴族主義的であつたのに対し、一般民衆の哲学であつた点において、たしかに最も大きな歴史的役割を果し得る条件を具備していたといふことができるであろう。人間の精神的向上を確保し、創造し、豊富ならしめる根源力としてのギリシヤ的価値愛がそれ自体価値を有することは、人間の思想の歴史が示す如くである。だからそのような思想はキリスト教の経典の中にも見出される。しかし、また、そのような思想の限界を示すのも、またキリスト教の経典である。

ギリシヤ的愛が貴族主義的・選択的・特殊であるのに対して、キリスト教的愛は抱擁的、普遍的である。ユダヤ教の愛は未だ排他的・特殊である。旧約の宗教においては神の律法に従うもののみが価値ありとせられる。ところが「今やユダヤ人もギリシヤ人もなく奴隷も自主もなく男も女もなし」<sup>3)</sup>というパウロの思想のうちには一応ギリシヤ的価値観が否定されている。しかしイエス・キリスト自身は律法を否定しようとしたのではなく、これを成就しようとしたにすぎない。正しいものを愛し、正しくないものを愛さないのは人間の自然的感情である。しかしキリスト教の愛は人間の自然的風情を超克するところに成り立つ愛である。自然的愛は愛に報いるに愛をもつてし、憎悪に報いるに憎悪をもつてするが、キリスト教の愛は神の人間に対する絶対的の愛に対する感激、すなわち信仰にもとづいて、この絶対的愛を人間的関係の上に反映したものにほかならない。かくてキリスト教においては、すべての人間が愛の対象となる。この愛において初めてギリシヤ的ヒューマニズムにおいて、いわば見捨てられた民衆は救われることになる。プラトンの愛国的情熱は民衆を捨て、少数の偉大な支配者をつくることによつて国家を救済しようとしたが、それが発想の仕方において正しくなかつたことは、単なる理論としてよりむしろ歴史的現実として受け取る方が一層理解に容易であろう。これに対して、キリスト教の愛は少数の支配者をつくるよりは、むしろ偉大な民衆をつくり出すように働く。しかもそのような愛の発動の仕方が根本的には価値観の相違から出ているところに重要な問題が横たわつている。

再びペスタロッツチーの場合について考えてみよう。イエス・キリストは「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは義人を招くためではなく、罪人を招くため

ある」<sup>4)</sup>と言つたが、ペスタロッチーもやはり「寵児の忍び寄るところでは愛は忽ち消え失せる。愛の力は寵児の妖術を遠ざけ、そしてその詐欺を憎む」<sup>5)</sup>と述べている。彼にとつては「王座の上にあつても木の葉の屋根のかげに住まつても人間はその本質において同じ」<sup>6)</sup>であつたのである。彼はまた「乞食の子供も王侯の子供もその本質において同じであり、同じ人間性がすべての心に花咲いている」<sup>7)</sup>とも語つている。ここで彼がいう人間の本質とは、すべての人間が神から与えられたものとして、その最内部に秘めている人間性のことである。

以上の如く解するとき、キリスト教的価値観は実に彼の全人格に滲透していたいということが出来る。「われわれは最も少く自己のために生き、最も多く他人のために生きるとき、最も実存的に生きる」<sup>8)</sup>というのが彼の不動の信念だつた。この彼の信念は彼のメーデを特色づけ、自己活動を彼のメーデの第一法則と呼び、そしてそれに結びつく第二法則をば次のように言いあらわしている。「人間はただ単に自己のためにのみこの世にあるものではない。すなわち彼は彼の同胞の完成を通して初めて自己を完成し得るものである」<sup>9)</sup>。このような思惟方式はキリスト教的な考え方が彼の哲学や彼のメーデを基底づけ、その本質を形づくつていることを示す。ところで、われわれにとつて重要な意味をもつのは、まさにこの点である。彼のキリスト教が教会の教義に合つているか否かは、このさい第二義的な意味しかもたない。

言うまでもなくペスタロッチーのヒューマニズムは、ヒューマニズムである限りにおいて、ギリシャに源を発するヒューマニズムと相通ずるものをもつている。しかしペスタロッチーのヒューマニズムにはギリシャのそれには見出されない特殊な意味が含まれている。それは言うまでもなくキリスト教的愛が彼の全思想を基礎づけているが故である。実に彼においてギリシャ的愛とキリスト教的愛とは一つに融合して彼の人格と思想とを形成している。この二つの愛が一つに融合したとき、最も偉大な歴史的成果が生み出されたとデイルタイ(Wilhelm Dilthey 1833—1911)は言つているが、第十八世紀の新人文主義の思想は、まさに、そういう意味での最も偉大な歴史的成果の一つである。

以上の考察によつて明らかなように、われわれの生活原理としての愛は宗教的裏づけをもつことによつて真に全きものとなる。デモクラシーの精神的基礎もやはり、そのような愛に求められなくてはならない。デモクラシーの本質は、簡単にいえば、愛である。なぜならばデモクラシーとは、しよせん社会的理想であり、一つ的生活様式であり、人間精神の一つのあり方であり、最高善はすべての人類の幸福に存するとする精神的態度であるからである。本来デモクラシーにおける人間の平等ということは単に心理的、法律的の平等ではなくて、本質的に道義的のもの、すなわち神に対して人間の有する道義的關係が平等であるということである。このような平等な道義的關係を確立する原理が愛である。そこには当然に宗教的裏づけが予想されなくてはならない。

教育愛もまた抱擁的・普遍的であらねばならない限り、当然キリスト教的愛による基礎づけをもたねばならない。教育活動が一種の文化活動であるという意味では、それはエロスによつて説明すべき面を具えている。しかしエロスの世界観において遂に真の教育が成立せず、それとキリスト教との結合において初めて真の生産的な教育が生れたことを思うとき、われわれは、すべての教育には宗教的基礎づけが与えられなくてはならないことを知る。

### III 宗教教育上の問題

以上論ずるところによつて、宗教なしには真の教育が成立し得ない理が明らかになつた、しか

し本来、教育を全うせしめるはずの宗教が、却つて教育に禍を及ぼし、その発展を妨げた場合が少なくない。それは宗教が一つの宗派となり、一つの社会集団として政治的な力をもつに至つた場合である。しかし宗教としては一つの社会集団を形成して、何らかの政治的な力を獲得しないと、大きな社会的機能を営むことができないし、また一つの社会集団を形成することが宗教生活の発展に役立つこともあるので、単純に宗派を否定し去ることもできない事情にある。もちろん宗派が精神の純粹性を忘れて、ただ政治のとりことなつてしまうとき、社会的に大きな弊害をもたらす、教育の発展の妨害になることは明らかである。また現実的には、こういう場合が多いので、現代においては特定の既成宗教を公立学校のカリキュラムからしめ出す世俗教育が隆盛を見るに至つた。しかしいづれの国においても、いかに世俗教育が盛んであつても、教育と宗教との完全な分離はできていない。また、できないのが当然である。

わが国においても、すでに明治時代から何らかの既成宗教が学校教育の中にとり入れられることは許されなかつた。明治32年文部省訓令第十二号には「官立公立学校及び学科課程に関し、法令の規定ある学校においては課程外たりとも宗教上の教育を施し、または宗教上の儀式を行うことを許さざる」ことが規定されている。その後、長らく宗教教育が禁ぜられていたが、やがて沢柳政太郎、姉崎正治、谷本富などによつて宗教教育の必要が主張せられるような情勢になつた。そこで昭和3年7月には従来の教育宗教分離の方針を緩和し、特定の宗教団体の教義を強制することなく、宗教全般に通ずる知識を授け、また宗教的情操を涵養することを目的とする宗教教育は行なつても、さしつかえないことになつた。そして昭和10年には文部次官の依命通牒によつて、宗派的でない限り宗教教育が公認せられることになつた。第二次世界大戦中、特にわが国においては、宗教教育は、もつぱら国家神道の範囲内に限られるような観を呈したが、しかし戦後のわが国においては、好むと好まざるとにかかわらず、再び宗教教育に、しかも世界的背景をもつた宗教に関心をもたざるを得ない情況にある。好むと好まざるとにかかわらずというのは、本来、宗教的信仰は各個人の自由に属する問題であるが、現代においては、すでに言及したように、世界的背景をもつた宗教は単なる宗教にとどまらないで、政治的権力とも結合して、一定の社会的理想と実現すべく機能しているが故である。いかに強大な政治的権力も、倫理的理想が誤つていたり、低かつたりすると、必然的に不安定を招く。そこで政治は、その確固たる倫理的理想を世界的に公認された宗教において見出そうとする。なぜなれば世界的宗教は、長き歴史において、大きな犠牲を払うことによつて、却つてその真の価値がテストされ、今や最も権威あるよりどころとして世界人類によつて承認せられるに至つているからである。われわれにとつて、長き歴史においてテストされた価値ほど確実なものはない。それは、いかなる理論も抗することのできない強い説得力をもっている。それは古典が歴史的にテストされることによつて価値づけられているのと同然である。かくてわれわれは民族の生命をつなぐ上で重大な役割を果すべき職業に従事する者として、当然に宗教の問題にも関心をもたざるを得ない。しかしそれは、もはや単なる個人的な安心立命の宗教にとどまるものであつてはならないことは、以上説くところによつて明らかであろう。だからこそ日本国憲法第二十条には「信教の自由は何人に対してもこれを保障する」とあり、また教育基本法第九条でも、宗教教育に関して、「宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は教育上これを尊重しなければならない」と規定されているのである。

さて、教育において宗教を問題とする場合、それは、もちろん宗派的宗教ではなくて、宗派を

超えた宗教、もしくは宗派にとらわれない宗教を意味する。それは内容的には宗教的情操のことである。しかし宗教的情操というも、やはり特定の宗教を通して最も効果的に涵養されるから、既成宗教を全面的に否定することは許されないだろう。しかしこの場合、一般論として言い得ることは、教育に取り入れられる宗教は、すべて社会化された宗教でなくてはならないということである。なぜなれば、われわれにとつての教育は社会的機能としての教育であるから、そういう教育と内的関連を保つて働く宗教もまた一つの社会的機能を営むものとして考えられなくてはならないからである。ところで社会的に最も大きな背景をもち、近代デモクラシーの形成のために歴史的に最も大きな社会的機能を営んで来た宗教はキリスト教であるから、具体的には当然、その宗教を念頭において問題を考えることになるが、しかし、この場合、それは、もちろん単なる信仰問題としてではなく、教育と生きた関連をもつた一つの社会的機能として問題にするわけである。

さきに明かにしたように、ギリシヤ的愛は人間の自然的感情の肯定の上に立脚するが故に、完全に自己を解放することのできぬ愛である。それに対して真の宗教的愛は人間の自然的感情を超越するところに生れる愛といつてよからう。しかし真の平和を約束するものは、そのような愛において、ほかにない。なぜなれば人間の自然性の肯定のあるところ、つねに動物的な戦いがくり返されるのみだからである。すべての人間は他の人々との関係をつくることによつてのみ価値を創造する。社会は人間相互の間の奉仕のやりとりによつて成り立つ。しかもこの奉仕のやりとりが密接であればあるほど、それだけ多くの社会的価値がつくり出され、それだけ健全な社会生活が営まれる。つまり文明と、そのすべての価値は人々間の協同の持続と発展とに依存する。ところが人間相互の協同は、それぞれの者が自己否定的に働くことによつて初めて可能である。ところで協同の実現のために同胞に対する奉仕の態度を個人に教え込むことが社会的宗教の第一の目的であるが、それは同時に社会化された教育の目的でもある。かくて宗教と教育との内的結合が成立するが、それは自己否定の論理に媒介されて初めて可能である。

しかし、自己否定の論理は、前に述べた道徳の基礎を人間の自然的衝動において見出そうとする立場と、いかに結びつくであろうか。つまり人間の自然的衝動の肯定の上に道徳の成立を見ようとする立場には否定的モメントははいつて来ないのではないかということである。しかしわれわれは真の意味での自己否定は最も強い自己肯定があるところのみあるという一つの逆説的論理が成り立つことを知らなくてはならない。言うまでもなくヒューマニズムの立場は、あくまでも自己肯定の立場であるが、宗教的論理としての自己否定もまた、このヒューマニズムにおいてしか考えられない。そしてヒューマニズムにおける自己否定にして初めて真の意味での宗教を可能にし、そしてその意味での宗教に裏づけられることによつて初めてわれわれの道徳は完成する。つまり最も強い自己肯定があるところに最も強い自己否定が起り、そしてその自己否定がより大きく自己を肯定することになる。これが人間存在の論理である。

国家も個人と同様に、自己を否定することによつて、却つてより大きく自己を肯定することになる場合がある。しかしその自己否定によつて生ずる価値は自己肯定の力に相応する。あくまでも国家は逞しい野性をもたねばならない。文明によつて生命力の弱まった国家には真の意味での自己否定は起り得ない。完全な自己否定は人間として、また国家として生きることの止めることであるから、個人についても、国家についても、生存する限りにおいて、あり得ないことである。しかし、自己肯定に相応した力をもつて起る自己否定が、究極において、より大きな自己肯定を結果することは、個人についても、国家についても、同様に妥当するであろう。ここに宗教の本



質が見出される。かくて真の宗教は、個人にとつても、国家にとつても、重要な意味をもつものと考えざるを得ない。

そこでペスタロッチーの宗教について考察するに、彼のヒューマニズムには全き意味での自己否定はない。彼のヒューマニズムは、あくまでも人間の自然性の肯定の上に立っている。そして宗教及び道徳の本質を人間の自然性の向上発展において見出す。しかし私の解するところでは、彼のヒューマニズムは単なる自己肯定を意味しない。彼のヒューマニズムには明らかに自己を否定することによつて、より高き次元において自己を肯定しようとする意図があらわれている。それは疑いもなくキリスト教思想からの影響である。ナトルプ (Paul Natorp 1854-1924) も言うように、たしかに彼の宗教において本来の啓示信仰を見出すことは困難であるが、しかし彼の思想並びに実践においては自己否定的なモメントが強く働いていることは否むことができない。「われわれは最も少く自己のために生き、最も多く他人のために生きるとき、最も実存的に生きる」という彼の言葉は最もよき証言であり、彼の生涯は実践をもつて、この言葉の精神を実証しようとしたものである。また彼のメトーデに関する理論においても、「人間はただ単に自己のためにのみこの世にあるものではない。すなわち彼は彼の同胞の完成を通して初めて自己を完成し得るのである」ということをメトーデの第二法則としていることはすでに指摘した通りである。ここには明らかに、一旦自己を否定することによつて、よりよく自己を肯定することができるという論理が働いている。かくて彼のヒューマニズムが単なるギリシヤ的ヒューマニズムではなくて、キリスト教的論理によつて媒介されて一層深化したヒューマニズムであることが理解される。しかし人或は彼のヒューマニズムにおける自己否定が不徹底であることを指摘するかも知れないが、もちろん教育においては宗教におけるが如き徹底した自己否定はあり得ない。その意味で教育と宗教とは明らかに区別される。しかし宗教との結びつきをもたない教育があり得ないこともまた真実である。

ところで人間関係において宗教的精神が最も自然的に生きて働くのは親と子、なかんずく母と子との関係である。そこでは自己否定が何の意識的努力もなしに極めて自然的に行われる。だからそこでは宗教と自然とが一つに融合していると言うことができる。かくてペスタロッチーによれば、宗教教育とは、この母子の関係をを通して、母の子に対する愛に象徴された神の人間に対する愛を直観させることである。これがペスタロッチーの宗教的直観の原理である。彼はそれを次のように説明する。「私は間もなく知る。愛・信頼・感謝の感情と服従の行為とは、私がそれらを神に向ける前に、すでに私の心のうちに発展してはならないことを。私が神を愛し、神に感謝し、神を信じ、神に従うの心を起す前に、予め私は人々を愛し、人々を信じ、人々に感謝し、人々に服従しなくてはならない。というのは、いやしくも自分の見ない同胞を愛さない人が、どうして見ない天の父を愛するであろうかと考えられるからである」<sup>10)</sup> 神に対する愛もしくは認識が人間に対するそれから始まるところにペスタロッチーのヒューマニズムの立場がある。しかも彼は人間の世界において最も確実な指標を母子の関係において見出す。それこそ直ちに神の国に通ずる道なのである。だから彼は、「母子間の自然的関係のうちに、人間の造物主に対する帰依に固有な情調の感覚的萌芽が、その全範囲において存在している」<sup>11)</sup>とか、或いはまた、「母は昇る朝日において、小波立つ小川において、樹々の枝において、花の輝きにおいて、露の滴りにおいて、この万物を愛する神を、その子に示す。彼女はその子に対して、彼自身において、彼の目の輝きにおいて、屈伸自在の彼の関節において、彼の言葉の調子において、万物に遍在する神を示す」<sup>12)</sup>とか言っているのである。従つて宗教教育を行うに最も効果的な場としての家庭は新

しい教育体系において重要な地位を占める。教育基本法第七条において家庭教育が重視されねばならないことが、うたわれているのも、そういう理由からである。

#### IV 宗 教 教 育 と 家 庭

人間教育において家庭の機能を重視することは極めて重要な着眼である。従来の教育学においては家庭というものを、さほど重要な問題として取り上げることを行なかつた。しかし教育の場を学校のみに限定する考え方は、それ自体生産的ではない。家庭を抜きにして教育を論ずることは、観念論的思想家の好んで用いる思惟方式であるが、しかしそれは、その出発点において誤つていっているといつてよい。人間の最も生命的な生活の場は家庭であり、従つてそこで行われる教育があらゆる教育の中で最も自然的であり且つ生命的であるにもかかわらず、そのような人間の家庭生活を抜きにして、教育を単に国家的立場から、もしくは単に個人的立場から、或いはまた単に階級的立場や人類的立場から考察することが、いかに空虚な、非生産的な理論を導き出すことになるか、敢て説明する必要もあるまい。ところで教育において宗教に高き地位を認める立場は、宗教教育の最も本来的な場が家庭であるところから、必然的に家庭教育を重視する立場を意味することにもなる。

これまでの教育学が家庭生活と切り離して学校教育のみを問題にする傾向が強かつたことを、さきに指摘したが、社会的見地に立つて考えるとき、学校教育と家庭教育とは当然に、その内的関連においてとらえられなくてはならない。シュタイン (L. v. Stein 1815-1890) は国家が個人と同じように人格でなくてはならないという。つまり人間が最高の使命を果すためには、国家が一般的人格でなくてはならないというのである。しかしそういう意味での当為が国家的生活において現実化されるためには、ペスタロッチーも言うように、家庭的関係が国家にまで拡充されることが必要である。なぜならば人間のすべての生活圏のうちで、家庭におけるほど人格的關係が自然的に確立している場所は他にないからである。

ペスタロッチーによれば、家庭は自然的結合にもとずいた道徳的にして、またこの上もなく神聖な関係である。そこでは自己保存の衝動は同棲者に対する配慮、すなわち好意と密接に結合している。家庭を形成する中心的存在としての父と母とは愛のきずなによつて結ばれ、そしてその結合関係のうちには子供は安住する。国家は愛他主義によつて強固となり、発展するが、この愛他主義を生み出す唯一の場所が家庭である。ペスタロッチーがくり返し述べているように、子供たちが愛し、服従し、奉仕し、相互の権利を尊敬することを学ぶのは、ひとえに家庭においてである。もし家庭が奉仕と自己犠牲の精神をその成員にうえつけることができなかつたら、このような精神を社会一般から学びとることは困難である。家庭において子供は社会のすべての本質的な関係を経験し、権威や服従や忠実や、その他すべての人間道徳の基本を修得する。同胞心の理想も、やはり家庭生活によつてつちかわれる。<sup>13)</sup>以上に述べた如き意味において、家庭は宗教教育を行うための最も本源的な、従つて最も効果的な場所であるといふことができる。

#### 註

- 1) 内村鑑三全集第二巻(岩波書店 昭和二十八年) 221頁
- 2) 同 書 219頁—200頁及び229頁
- 3) ガラテヤ書 3,28
- 4) マルコによる福音書 2,17
- 5) Pestalozzis sämtliche Werke hsg. v. L. W. Seyffarth, Liegnitz, 1899-1902, Bd. IX, S. 258
- 6) Kritische Ausgabe von Pestalozzis Sämtliche Werken hsg. v. A. Buchenau, Ed. Spranger u. H.

- Stcttbacher (略号 Kr.), Bd. I, S. 268
- 7) H. Morf, Zur Biographie Pestalozzi's. Ein Beitrag zur Geschichte der Volkserziehung, Bd. III, S. 167
  - 8) Kr. X, 243
  - 9) Pestalozzis Auggewählte Werke hsg. v. Friedrich Mann, Bd. III. S. 290
  - 10) Heinrich Pestalozzi Gesammelte Werke hsg. v. E. Bosshart, E. Dejung, L. Kempster u. H. Stettbacher (略号 R.), Bd. IX, S. 293
  - 11) R. IX, 297
  - 12) R. IX, 310
  - 13) 松田義哲著教育哲学 (協同出版, 昭和35年) 87頁—93頁参照

## RÉSUMÉ

### Religion and Education

Man cannot but feel interested in religion, so long as he cannot avoid death, but I want to consider religion as a sociological problem, in relation with education, Especially ang religion which has world-wide influence has had political character, and so we, as historical human beings, are requested to have a deep knowledge of this problem, in order to live more efficiently in the present century. It has been a common knowledage that religious spirit will be necessary if we want to educate better. We, too, start from this point. It is in this sense that we pay special attention to Pestalozzi. But Pestalozzi tried to put religion in the limits of humanism. There lies an important problem. It is impossible to let *eros* include *agape*. But we can heighten or deepen ourselves on the way of *eros* in reference to the transcendental. There we find the true significance of *existenz*. When true unity is brought about upon mankind by our existential way of life, true peace would be able to become a reality. We can say it is a higher ideal than Dr. Brameld's internationalism, because it aims to make Dr. Brameld's internationalism more spiritually founded. In this sense education must be connected with religion. At the same time home life must be regarded as of importance as a place of religious education.